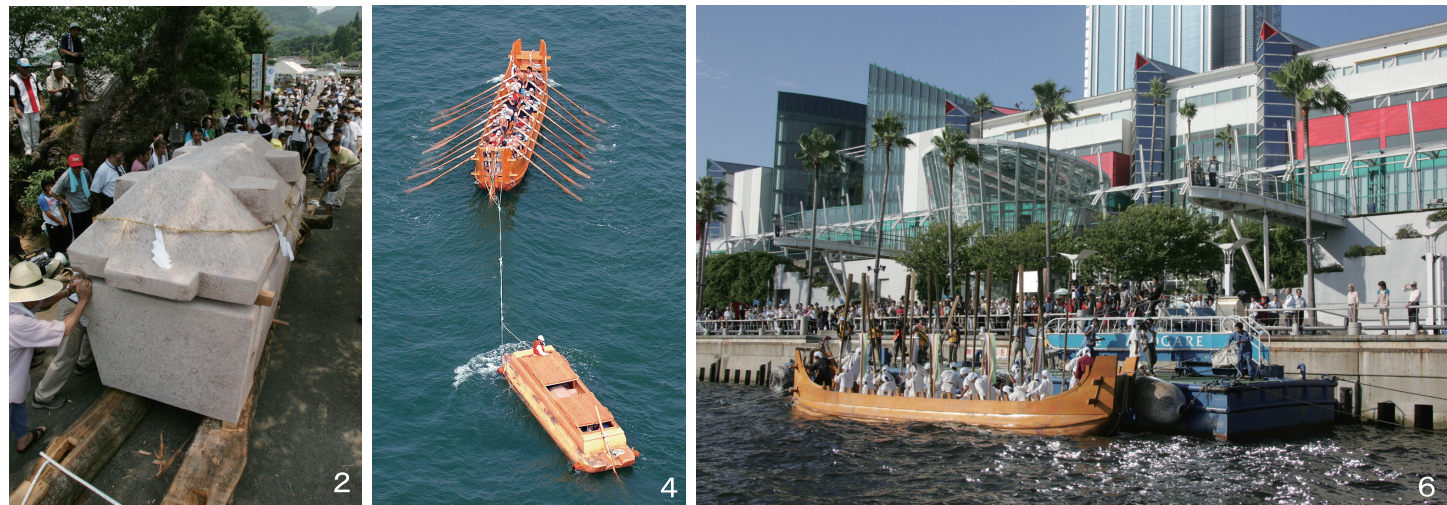




1 「海王」お披露目式（宇土マリーナ、平成 16 年 10 月 31 日） / 2 石棺曳き出し式（宇土市網津町大歳神社前、平成 16 年 7 月 24 日） / 3・4 宇土マリーナを出航、有明海を進む「海王」（平成 17 年 7 月 24 日） / 5 愛媛県今治市来島での歓迎（8 月 12 日） / 6 大阪市大阪南港到着（8 月 26 日） ※写真は、1 を除いて読売新聞西部本社撮影



「大王のひつぎ実験航海」20 周年記念 講演会・パネルディスカッションを開催！

継体大王と日本古代史上最大の内乱「磐井の乱」をテーマに講演会を開催します。あわせて「大王のひつぎ実験航海」関係者によるパネルディスカッションを行います。ぜひご来場ください！

【日 時】令和 7 年 10 月 18 日（土）開場 13:30 開会 14:00 ～（16:00 終了予定）

【会 場】宇土市民会館 大会議室 ※入場無料（事前申込不要）

【講 演】「水運王継体と磐井の乱」講師：森田 克行（高槻市文化財アドバイザー）

【パネルディスカッション】「古墳時代の船と石棺輸送」

【パネリスト】森田 克行（上掲）・高木 恭二（宇土市文化財保護審議会委員長）
下川 伸也（国立研究開発法人水産研究・教育機構 水産大学校長）

【コーディネーター】藤本 貴仁（宇土市教育委員会文化課長）

【主催】（一社）熊本県青年塾 【共催】大王のひつぎ保存委員会 【後援】宇土市・宇土市教育委員会

今城塚古墳で行われた馬門石棺修羅曳きイベント「1000 人で運ぶ大王の石棺」（平成 17 年 8 月 28 日）
※読売新聞西部本社撮影

だいおう 「大王のひつぎ実験航海」から 20 年 “古代と海への挑戦”を振り返る

一五〇〇年前の石棺輸送の謎に挑んだプロジェクト

「大王のひつぎ実験航海」とは

今から一五〇〇年前の古墳時代、宇土・網津産の馬門石で造られた石棺は、どうやって、どのようなルートで近畿地方の大王（天皇の古い名称）を含む有力豪族の「ひつぎ」として長距離輸送されたのか。

その謎に挑むため、今から二〇年前の夏に行われた「大王のひつぎ実験航海」。延べ七四〇人の漕ぎ手が参加し、宇土・大阪間の海路約一〇〇kmの石棺輸送を再現・検証するという世界的にも類をみないプロジェクトでした。

馬門石製石棺の謎

継体大王の陵墓・大阪府高槻市今城塚古墳（六世紀前半）や推古女帝が葬られた奈良県橿原市植山古墳（六世紀末～七世紀前半）をはじめ、中国・近畿地方では十四基の馬門石製の石棺が確認されています。

このことを地道な石棺研究で明らかにした市職員（当時）の高木恭二さんは、古墳時代における石棺輸送の実態解明を目指して実験航海を発案。多くの賛同者を得て、平成十六年（二〇〇四）四月に考古学等の研究者で組織する石棺文化研究会、宇土市の地域おこし団体・熊本県青年塾、読売新聞西部本社、宇土市の四者で構成される「大王のひつぎ実験航海実行委員会」が組織されました。



継体大王（531 年没）の陵墓・今城塚古墳。総長 350m の巨大前方後円墳

今城塚古墳から見つかった馬門石製石棺の蓋の破片

推古女帝と息子の竹田皇子が葬られた植山古墳出土の馬門石製石棺

「大王のひつぎ」海を渡る

平成十六年の夏から一年かけて、実験航海で使用する重さ約七トンの馬門石製石棺や古代船「海王」、石棺積載台船「有明」・「火の国」等を復元。航海をサポートする現代船三隻とともに、平成十七年（二〇〇五）七月二四日、目的地の大阪南港（大阪市）を目指して宇土マリーナを出航しました。会場に駆けつけた五〇〇人を超える人たちは、「頑張れ！」と大きな声を上げながら手を振って盛大に船団を見送りました。

有明海、玄界灘、瀬戸内海を経て、大阪南港到着までに船団が立ち寄った港は計二ヶ所。船団は各寄港地で温かく迎えられ、和やかな雰囲気の中歓迎会や交流会が催されました。しかし、航海中は困難な場面の連続。山口県下関市の水産大学校端艇（カッター）部を中心とする漕ぎ手の学生たちは、時に荒波の中、激しく揺れる「海王」を懸命に操船しました。

遥か一〇〇六kmの大航海

実験航海では、順風、逆風、逆潮等の様々な条件で航海データを取得しました。平均速度は、「海王」単船で四・三ノット（時速約八・〇km）、石棺を載せた「有明」や「火の国」を「海王」が曳いて二・二五ノット（同約三・七～四・六km）の速度が得られました。

宇土マリーナ出航から三四日目にあたる八月二六日の夕方、ついに大阪南港に到着。準備期間を含めて約三年にわたる「古代と海への挑戦」は、大成功で幕を閉じました。

※実験航海の詳細は、市ホームページ「宇土市デジタルミュージアム」をご覧ください。

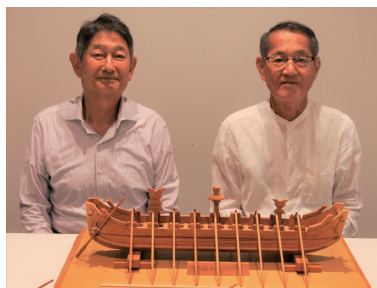
実験航海発案者・高木恭二さんと航海隊長を担った下川伸也さんに、市文化課・藤本貴仁課長（学芸員、実行委員として陸上支援を担当）がお話をうかがいました。

石棺研究が導いた実験航海

藤本 発案の経緯をお尋ねします。

高木 長年の石棺研究がきっかけです。研究を進めるうち、近畿等の九州外の一部の石棺が宇土の馬門石（阿蘇溶結凝灰岩）に似ていることに気づいたので、熊本大学の渡辺一徳先生（地

▲高木 恭二 さん
1951年生まれ。宇土市出身。長年、市職員として文化財保護行政を担当。市教育部長、市民会館館長を歴任。現在、市文化財保護審議会委員長。



▲下川 伸也 さん
1960年生まれ。熊本市出身。専門分野は水産学（漁船運用学等）。現在、水産大学校（山口県下関市）校長。



質学）との共同研究で論文を発表。考古学界の知るところとなりました。藤本 論文を発表された一九九〇年頃、近畿に分布するピンク色の石棺の石材産地は、大阪府と奈良県の境にある二上山（にじょうさん）というのが定説でした。馬門石説は支持されなかったのでは。

高木 発表当初、学界では否定的でしたが、二〇〇〇年頃には定説になりました。研究に没頭するうちに、復元した石棺を実際に運んでみたいと考えられるようになりましたが、誰に話しても「面白い話だね」と言うだけでした。

実験航海の実現に向けて

高木 ところが、友人の北九州の研究者はとても積極的で、実現に向けてどんどん話が進んでいきました。宇土の地域づくり団体・熊本県青年塾や読売新聞西部本社の協力も得ました。

下川 実験航海の話が私が聞いたのはその頃でした。大王のひつぎ実験航海の三〇年前に「野生号プロジェクト」（釜山―博多間の人力航海）というのがある、漕ぎ手として水産大学校が参加した経緯がありました。

藤本 下川先生が水産大学校の学生だった頃、野生号に関わった方たちが、まだ水産大におられたんですね。

盛大な歓迎を受けましたね。

高木 佐賀の唐津では、早くから衣装の準備をしていただき、盛大な歓迎イベントがありました。口之津（くちのづ）（長崎県南島原市）では、寄港記念の石碑まで作っていただきました。特に印象に残っているのは、中世の村上水軍の復元船といっしょに海王が入港した今治市（愛媛県）の歓迎イベントですね。下川 寄港地では、たくさんの幼稚園児や小学生が待っていたので、なるべく入港予定時刻どおりに港に入ってあげたいと思っていました。

実験航海でわかったこと

下川 実験航海の結果、船速は平均二ノット（時速三・七km）前後と推定されます。風や波の力、潮流を読み取らないと目的地に着かない状況下で、一五〇〇年前に長距離を運んでいた事実。すごい航海能力だと感じました。藤本 海のことを熟知した人たちが



口之津港で寄港記念石碑とともに



浦ノ浦港に入港する海王

携わらないと難しいということですね。下川 瀬戸内海は島が多く、複雑な海域ですからね。実験航海の結果をふまえると、当時

下川 そうです。その方たちの経験を聞いたので、大阪までの実験航海の計画を立てやすかったと思います。

藤本 修羅（石棺等の重量物運搬用木製ソリ）の原木を伐採して製作が始まったのは二〇〇四年の春。同じ頃、復元石棺の製作も動き出しましたね。

高木 ミツ塚古墳（大阪府藤井寺市）出土修羅を参考に、同じものを造ろうと考えました。青年塾のメンバーが宇土半島で必死になって原木を探し、宇城市不知火町で良木を見つけました。

藤本 石棺復元用の馬門石の巨石は、身が二〇t、蓋が一五tの重さ。なかなか見つかりませんでしたね。

高木 二〇〇四年の夏、石棺と修羅が完成し、機運が高まりました。

下川 志賀島（福岡市）での海王の造船では、座る所や櫂の間隔をいつも漕いでいるカッターボートの寸法に近づけてほしいと依頼しました。

高木 海王は宮崎県の西都原一七〇号墳出土舟形埴輪をモデルにしましたね。運搬方法は、石棺を載せた台船を海王で曳航する案を採用しました。

「大王のひつぎ」海を渡る

藤本 宇土マリナでの出航式終了後、職場に戻ってインターネットを見たら、検索サイトのトップページに実験航海の記事があつて驚きました。

高木 それだけ全国的に注目を集め

た事業でした。

下川 途中の玄界灘で海が荒れて、台船に海水が入った時は大変でした。

高木 宗像市（福岡県）の沖ですね。本当に沈みかけたんですね。最大の難関だったんじゃないですか。

藤本 やはり瀬戸内海とは、海の状態が違いますか。

下川 波が全然違います。瀬戸内海は両側が陸地で外海の波が入ってきませんので。関門海峡を抜けるまでは外海ですから、全体的に荒かったです。高木 まさに実験考古学。やって初めてわかることがたくさんある。

下川 古墳時代には灯台が無いので、その役割を海辺の古墳が果たした可能性がります。海際に少し目立つような物があれば目標にできるので。

高木 古墳があるということは、集団や豪族がいることを示しています。確かに航海の上で大事なことです。

藤本 地域ごとに豪族との交流が無いと石棺は運べないですね。物資の供給や停泊する場所も必要ですから。

高木 ヤマト王権の大王（天皇の古称）のひつぎを運ぶ場合は、特にしっかりした体制で行われていた可能性が



瀬戸内海（愛媛県沖）にて（下川さん）

域支配を強固にしたと思います。

藤本 机上ではわからないことを、実験航海で検証できたと思います。

高木 古代人がやったことを、今考え得るなかで限界まで検証した実験航海でした。船、石棺、修羅を復元し、実験航海を行ったことで、多くのことが証明されました。また、航海では漕ぎ手の学生や、寄港地で多くの協力がありましたが、古墳時代当時もそれに代わる人がいたということ。その協力無しに石棺輸送はできなかったということも証明できたと思います。

藤本 世界的にも、この規模以上の実験航海は行われていないですよ。

高木 実験航海で使った船や石棺をどのように残して活用するか。今後の課題ですね。

藤本 お二人とも長時間にわたりありがとうございました。高木・下川

ありがとうございました。



大阪南港を目指す海王



大阪南港にて（高木さん）

※航海時の写真は、全て読売新聞西部本社撮影。また、対談内容の詳細は、市ホームページ「宇土市デジタルミュージアム」で公開中

